

1

解答解説のページへ

点  $O$  を原点とする座標平面において、点  $A$  と点  $B$  が  $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OA} = 5$ ,  $\overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OB} = 2$ ,  $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OB} = 3$  を満たすとする。

- (1)  $\overrightarrow{OB} = k\overrightarrow{OA}$  となるような実数  $k$  は存在しないことを示せ。
- (2) 点  $B$  から直線  $OA$  に下ろした垂線と  $OA$  との交点を  $H$  とする。 $\overrightarrow{HB}$  を  $\overrightarrow{OA}$  と  $\overrightarrow{OB}$  を用いて表せ。
- (3) 実数  $t$  に対し、直線  $OA$  上の点  $P$  を  $\overrightarrow{OP} = t\overrightarrow{OA}$  となるようにとる。同様に直線  $OB$  上の点  $Q$  を  $\overrightarrow{OQ} = (1-t)\overrightarrow{OB}$  となるようにとる。点  $P$  を通り直線  $OA$  と直交する直線を  $l_1$  とし、点  $Q$  を通り直線  $OB$  と直交する直線を  $l_2$  とする。 $l_1$  と  $l_2$  の交点を  $R$  とするとき、 $\overrightarrow{OR}$  を  $\overrightarrow{OA}$ ,  $\overrightarrow{OB}$ ,  $t$  を用いて表せ。
- (4) 3 点  $O, A, B$  を通る円の中心を  $C$  とするとき、 $\overrightarrow{OC}$  を  $\overrightarrow{OA}$  と  $\overrightarrow{OB}$  を用いて表せ。

2

解答解説のページへ

1 個のさいころを投げて出た目によって数直線上の点  $P$  を動かすことを繰り返すゲームを考える。最初の  $P$  の位置を  $a_0 = 0$  とし、さいころを  $n$  回投げたあとの  $P$  の位置  $a_n$  を次のルールで定める。

・  $a_{n-1} = 7$  のとき,  $a_n = 7$

・  $a_{n-1} \neq 7$  のとき,  $n$  回目に出た目  $m$  に応じて

$$a_n = \begin{cases} a_{n-1} + m & (a_{n-1} + m = 1, 3, 4, 5, 6, 7 \text{ のとき}) \\ 1 & (a_{n-1} + m = 2, 12 \text{ のとき}) \\ 14 - (a_{n-1} + m) & (a_{n-1} + m = 8, 9, 10, 11 \text{ のとき}) \end{cases}$$

- (1)  $a_2 = 1$  となる確率を求めよ。
- (2)  $n \geq 1$  について,  $a_n = 7$  となる確率を求めよ。
- (3)  $n \geq 3$  について,  $a_n = 1$  となる確率を求めよ。

**3**

解答解説のページへ

関数  $f(x) = \left| \cos x - \sqrt{5} \sin x - \frac{3\sqrt{2}}{2} \right|$  について、以下の問いに答えよ。

- (1)  $f(x)$  の最大値を求めよ。
- (2)  $\int_0^{2\pi} f(x) dx$  を求めよ。
- (3)  $S(t) = \int_t^{t+\frac{\pi}{3}} f(x) dx$  とおく。このとき、 $S(t)$  の最大値を求めよ。

4

解答解説のページへ

実数  $a, b$  と虚数単位  $i$  を用いて複素数  $z$  が  $z = a + bi$  の形で表されるとき、 $a$  を  $z$  の実部、 $b$  を  $z$  の虚部とよび、それぞれ  $a = \operatorname{Re}(z)$ 、 $b = \operatorname{Im}(z)$  と表す。

- (1)  $z^3 = i$  を満たす複素数  $z$  をすべて求めよ。
- (2)  $z^{100} = i$  を満たす複素数  $z$  のうち、 $\operatorname{Re}(z) \leq \frac{1}{2}$  かつ  $\operatorname{Im}(z) \geq 0$  を満たすものの個数を求めよ。
- (3)  $n$  を正の整数とする。 $z^n = i$  を満たす複素数  $z$  のうち、 $\operatorname{Re}(z) \geq \frac{1}{2}$  を満たすものの個数を  $N$  とする。 $N > \frac{n}{3}$  となるための  $n$  に関する必要十分条件を求めよ。

5

解答解説のページへ

関数  $f(x)$  と実数  $t$  に対し,  $x$  の関数  $tx - f(x)$  の最大値があればそれを  $g(t)$  とかく。

(1)  $f(x) = x^4$  のとき, 任意の実数  $t$  について  $g(t)$  が存在する。この  $g(t)$  を求めよ。

以下, 関数  $f(x)$  は連続な導関数  $f'(x)$  をもち, 次の 2 つの条件(i), (ii)が成り立つものとする。

(i)  $f'(x)$  は増加関数, すなわち  $a < b$  ならば  $f'(a) < f'(b)$

(ii)  $\lim_{x \rightarrow -\infty} f'(x) = -\infty$  かつ  $\lim_{x \rightarrow \infty} f'(x) = \infty$

(2) 任意の実数  $t$  に対して,  $x$  の関数  $tx - f(x)$  は最大値  $g(t)$  をもつことを示せ。

(3)  $s$  を実数とする。  $t$  が実数全体を動くとき,  $t$  の関数  $st - g(t)$  の最大値は  $f(s)$  となることを示せ。

1

解答解説のページへ

- (1)  $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OA} = 5$ ,  $\overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OB} = 2$ ,  $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OB} = 3$  のとき,  $\overrightarrow{OB} = k\overrightarrow{OA}$  と仮定すると,  
 $k^2\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OA} = 2$ ,  $k\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OA} = 3$

すると,  $5k^2 = 2$  かつ  $5k = 3$  となり, 両式を満たす実数  $k$  は存在しない。

- (2) 点 B から直線 OA に下ろした垂線と OA との交点 H に対して,  $\overrightarrow{OH} = s\overrightarrow{OA}$  とおくと  $\overrightarrow{HB} = \overrightarrow{OB} - s\overrightarrow{OA}$  となり,  $\overrightarrow{HB} \cdot \overrightarrow{OA} = 0$  から,

$$\overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OA} - s\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OA} = 0, \quad 3 - 5s = 0$$

すると,  $s = \frac{3}{5}$  から,  $\overrightarrow{HB} = \overrightarrow{OB} - \frac{3}{5}\overrightarrow{OA}$  である。

- (3)  $\overrightarrow{OP} = t\overrightarrow{OA}$ ,  $\overrightarrow{OQ} = (1-t)\overrightarrow{OB}$  のとき, 点 P を通り直線 OA と直交する直線を  $l_1$ , 点 Q を通り直線 OB と直交する直線を  $l_2$  とし,  $l_1$  と  $l_2$  の交点を R とする。

ここで,  $\overrightarrow{OR} = p\overrightarrow{OA} + q\overrightarrow{OB}$  とおくと,

$$\overrightarrow{PR} = p\overrightarrow{OA} + q\overrightarrow{OB} - t\overrightarrow{OA} = (p-t)\overrightarrow{OA} + q\overrightarrow{OB}$$

$$\overrightarrow{QR} = p\overrightarrow{OA} + q\overrightarrow{OB} - (1-t)\overrightarrow{OB}$$

$$= p\overrightarrow{OA} + (q+t-1)\overrightarrow{OB}$$

すると,  $\overrightarrow{PR} \cdot \overrightarrow{OA} = 0$  から  $5(p-t) + 3q = 0$  となり,  $5p + 3q = 5t$  ……①

また,  $\overrightarrow{QR} \cdot \overrightarrow{OB} = 0$  から  $3p + 2(q+t-1) = 0$  となり,  $3p + 2q = -2t + 2$  ……②

①②より,  $p = 16t - 6$ ,  $q = -25t + 10$  となり,

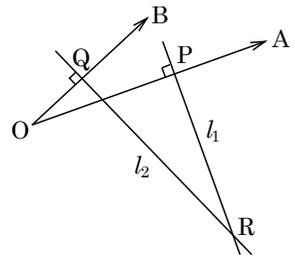
$$\overrightarrow{OR} = (16t - 6)\overrightarrow{OA} - (25t - 10)\overrightarrow{OB} \dots\dots\dots③$$

- (4) 3点 O, A, B を通る円の中心 C は, 線分 OA と線分 OB の垂直二等分線の交点なので, ③に  $t = \frac{1}{2}$  を代入すると  $R = C$  となり,

$$\overrightarrow{OC} = \left(16 \cdot \frac{1}{2} - 6\right)\overrightarrow{OA} - \left(25 \cdot \frac{1}{2} - 10\right)\overrightarrow{OB} = 2\overrightarrow{OA} - \frac{5}{2}\overrightarrow{OB}$$

### [解説]

平面ベクトルの基本題です。(4)は(3)の結果がストレートに利用できます。なお,(3)は(2)の結果を利用してもよかったです……。



2

解答解説のページへ

(1) さいころを  $n$  回投げたあとの P の位置  $a_n$  について、 $n \geq 1$  のとき、 $1 \leq a_n \leq 7$  であることを数学的帰納法で示す。

(i)  $n=1$  のとき

$a_0 = 0$  から、1 回目に出た目が 1, 2, 3, 4, 5, 6 のとき、 $a_1$  はそれぞれ 1, 1, 3, 4, 5, 6 となり、 $1 \leq a_1 \leq 7$  である。

(ii)  $n=k$  のとき

$1 \leq a_k \leq 7$  と仮定すると、 $k+1$  回目に出た目が 1, 2, 3, 4, 5, 6 のとき、 $a_{k+1}$  は右表のようになる。

これより、 $1 \leq a_{k+1} \leq 7$  となる。

(i)(ii)より、 $1 \leq a_n \leq 7$  である。

さて、 $a_2 = 1$  となるのは、右表より、 $a_1 = 1$  または  $a_1 = 6$  である。

$a_k \backslash$ 目	1	2	3	4	5	6	7
1	1	3	4	5	6	7	7
2	3	4	5	6	7	6	7
3	4	5	6	7	6	5	7
4	5	6	7	6	5	4	7
5	6	7	6	5	4	3	7
6	7	6	5	4	3	1	7

(a)  $a_0 = 0 \rightarrow a_1 = 1 \rightarrow a_2 = 1$  のとき

1 回目に出た目が 1 または 2 で、2 回目に出た目が 1 の場合より、その確率は、

$$\frac{2}{6} \times \frac{1}{6} = \frac{2}{36}$$

(b)  $a_0 = 0 \rightarrow a_1 = 6 \rightarrow a_2 = 1$  のとき

1 回目に出た目が 6 で、2 回目に出た目が 6 の場合より、その確率は、

$$\frac{1}{6} \times \frac{1}{6} = \frac{1}{36}$$

(a)(b)より、 $a_2 = 1$  となる確率は、 $\frac{2}{36} + \frac{1}{36} = \frac{1}{12}$  である。

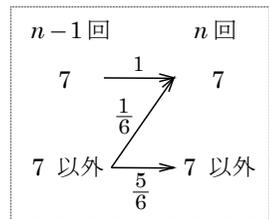
(2)  $a_n = 7$  ( $n \geq 1$ ) となる確率を  $p_n$  とおくと、 $p_1 = 0$  で、

$$p_n = p_{n-1} + \frac{1}{6}(1 - p_{n-1}) = \frac{5}{6}p_{n-1} + \frac{1}{6} \quad (n \geq 2)$$

これより、 $p_n - 1 = \frac{5}{6}(p_{n-1} - 1)$  となり、

$$p_n - 1 = (p_1 - 1) \left(\frac{5}{6}\right)^{n-1} = -\left(\frac{5}{6}\right)^{n-1}$$

よって、 $p_n = 1 - \left(\frac{5}{6}\right)^{n-1}$  となり、この式は  $n=1$  のときも満たしている。



(3)  $n \geq 1$  のとき、 $a_n = 1$  となる確率を  $q_n$  とおくと、(1)から、 $q_1 = \frac{1}{3}$ 、 $q_2 = \frac{1}{12}$

また、 $a_n = 6$  となる確率を  $r_n$  とおく。すると、 $2 \leq a_n \leq 5$  となる確率は、(2)から

$$1 - p_n - q_n - r_n = \left(\frac{5}{6}\right)^{n-1} - q_n - r_n \text{ となる。}$$

ここで、(1)の表を参照すると、 $n \geq 2$  で、 $q_n = \frac{1}{6}q_{n-1} + \frac{1}{6}r_{n-1} \dots\dots\dots \textcircled{1}$

$$\begin{aligned}
 r_n &= \frac{1}{6}q_{n-1} + \frac{1}{6}r_{n-1} + \frac{2}{6}(1 - p_{n-1} - q_{n-1} - r_{n-1}) \\
 &= \frac{1}{6}q_{n-1} + \frac{1}{6}r_{n-1} + \frac{1}{3}\left\{\left(\frac{5}{6}\right)^{n-2} - q_{n-1} - r_{n-1}\right\} \\
 &= -\frac{1}{6}q_{n-1} - \frac{1}{6}r_{n-1} + \frac{1}{3}\left(\frac{5}{6}\right)^{n-2} \dots\dots\dots \textcircled{2}
 \end{aligned}$$

すると、①+②より  $q_n + r_n = \frac{1}{3}\left(\frac{5}{6}\right)^{n-2}$  となり、①に代入すると、 $n \geq 3$  で、

$$q_n = \frac{1}{6}(q_{n-1} + r_{n-1}) = \frac{1}{6} \cdot \frac{1}{3}\left(\frac{5}{6}\right)^{n-3} = \frac{1}{18}\left(\frac{5}{6}\right)^{n-3}$$

### [解説]

確率と漸化式の難しめの問題です。問題文からイメージが湧かないので、最初に具体的に表を作ってみました。そして、その表を見ながら立式をしています。なお、表中の  $a_k$  が 2 の列は形式的に計算しただけなので、削除しても構いません。

3

解答解説のページへ

(1)  $f(x) = \left| \cos x - \sqrt{5} \sin x - \frac{3\sqrt{2}}{2} \right|$  に対し,  $g(x) = \cos x - \sqrt{5} \sin x - \frac{3\sqrt{2}}{2}$  とすると,

$$g(x) = \sqrt{6} \left( \cos x \cdot \frac{1}{\sqrt{6}} - \sin x \cdot \frac{\sqrt{5}}{\sqrt{6}} \right) - \frac{3\sqrt{2}}{2}$$

ここで,  $\cos \alpha = \frac{1}{\sqrt{6}}$ ,  $\sin \alpha = \frac{\sqrt{5}}{\sqrt{6}}$  とおくと,  $g(x) = \sqrt{6} \cos(x + \alpha) - \frac{3\sqrt{2}}{2}$

$-1 \leq \cos(x + \alpha) \leq 1$  より,  $f(x) = |g(x)|$  は  $\cos(x + \alpha) = -1$  のとき最大となり, 最大値は  $\left| -\sqrt{6} - \frac{3\sqrt{2}}{2} \right| = \sqrt{6} + \frac{3\sqrt{2}}{2}$  である。

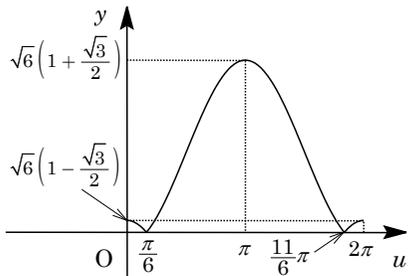
(2)  $I = \int_0^{2\pi} f(x) dx = \int_0^{2\pi} \left| \sqrt{6} \cos(x + \alpha) - \frac{3\sqrt{2}}{2} \right| dx$  に対し,  $u = x + \alpha$  とおくと,

$$I = \int_{\alpha}^{2\pi+\alpha} \left| \sqrt{6} \cos u - \frac{3\sqrt{2}}{2} \right| du = \sqrt{6} \int_{\alpha}^{2\pi+\alpha} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right| du$$

ここで,  $h(u) = \sqrt{6} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right|$  とおくと,

$h(u + 2\pi) = h(u)$  から,  $h(u)$  は周期  $2\pi$  の周期関数である。

さらに,  $h(2\pi - u) = h(u)$  から,  $y = h(u)$  のグラフは直線  $u = \frac{(2\pi - u) + u}{2} = \pi$  について対



称になることより,

$$\begin{aligned} I &= \sqrt{6} \int_0^{2\pi} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right| du = 2\sqrt{6} \int_0^{\pi} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right| du \\ &= 2\sqrt{6} \int_0^{\pi/6} \left( \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right) du - 2\sqrt{6} \int_{\pi/6}^{\pi} \left( \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right) du \\ &= 2\sqrt{6} \left[ \sin u - \frac{\sqrt{3}}{2} u \right]_0^{\pi/6} - 2\sqrt{6} \left[ \sin u - \frac{\sqrt{3}}{2} u \right]_{\pi/6}^{\pi} \\ &= 2\sqrt{6} \cdot \frac{1}{2} - 3\sqrt{2} \cdot \frac{\pi}{6} - 2\sqrt{6} \cdot \left( -\frac{1}{2} \right) + 3\sqrt{2} \cdot \frac{5}{6} \pi = 2\sqrt{6} + 2\sqrt{2}\pi \end{aligned}$$

(3)  $S(t) = \int_t^{t+\pi/3} f(x) dx = \sqrt{6} \int_{t+\alpha}^{t+\alpha+\pi/3} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right| du$

ここで,  $h(u)$  が周期  $2\pi$  の周期関数であることより,  $0 \leq u < 2\pi$  で考えると,

$S(t)$  が最大になるのは,  $\frac{(t+\alpha) + (t+\alpha + \frac{\pi}{3})}{2} = \pi$  のときである。

これより,  $t + \alpha = \frac{5}{6}\pi$  となるので,  $S(t)$  の最大値  $M$  は,

$$M = S\left(\frac{5}{6}\pi - \alpha\right) = \sqrt{6} \int_{\frac{5}{6}\pi}^{\frac{7}{6}\pi} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right| du = -\sqrt{6} \int_{\frac{5}{6}\pi}^{\frac{7}{6}\pi} \left( \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right) du$$

$y = h(u)$  のグラフは直線  $u = \pi$  について対称なので,

$$\begin{aligned} M &= -2\sqrt{6} \int_{\frac{5}{6}\pi}^{\pi} \left( \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right) du = -2\sqrt{6} \left[ \sin u - \frac{\sqrt{3}}{2} u \right]_{\frac{5}{6}\pi}^{\pi} \\ &= -2\sqrt{6} \cdot \left( -\frac{1}{2} \right) + 3\sqrt{2} \cdot \frac{\pi}{6} = \sqrt{6} + \frac{\sqrt{2}}{2} \pi \end{aligned}$$

### [解説]

定積分の計算問題です。周期性や対称性に注目することがポイントです。(3)の解答例は、グラフの形状をもとにした直感的な記述になっています。 $t$  の値で場合分けをした方がよかったですでしょうが。

4

解答解説のページへ

(1)  $z^3 = i$  を満たす複素数  $z$  を,  $z = r(\cos \theta + i \sin \theta)$  ( $r > 0$ ,  $0 \leq \theta < 2\pi$ ) とおくと,

$$r^3(\cos 3\theta + i \sin 3\theta) = \cos \frac{\pi}{2} + i \sin \frac{\pi}{2}$$

すると,  $r^3 = 1$  から  $r = 1$  となり,  $0 \leq 3\theta < 6\pi$  から  $3\theta = \frac{\pi}{2}, 2\pi + \frac{\pi}{2}, 4\pi + \frac{\pi}{2}$  であるので,  $\theta = \frac{\pi}{6}, \frac{5}{6}\pi, \frac{3}{2}\pi$  となる。

よって,  $z = \cos \frac{\pi}{6} + i \sin \frac{\pi}{6}$ ,  $z = \cos \frac{5}{6}\pi + i \sin \frac{5}{6}\pi$ ,  $z = \cos \frac{3}{2}\pi + i \sin \frac{3}{2}\pi$  から,

$$z = \frac{\sqrt{3}}{2} + \frac{1}{2}i, \quad z = -\frac{\sqrt{3}}{2} + \frac{1}{2}i, \quad z = -i$$

(2) (1)と同様に,  $z^{100} = i$  を満たす複素数  $z$  について,  $r^{100} = 1$  から  $r = 1$  となり,  $0 \leq 100\theta < 200\pi$  から  $100\theta = 2k\pi + \frac{\pi}{2}$  ( $k = 0, 1, 2, \dots, 99$ ) であるので,

$$100\theta = \frac{4k+1}{2}\pi, \quad \theta = \frac{4k+1}{200}\pi \quad (k = 0, 1, 2, \dots, 99)$$

すると,  $z = \cos \frac{4k+1}{200}\pi + i \sin \frac{4k+1}{200}\pi$  となり,  $\operatorname{Re}(z) \leq \frac{1}{2}$ ,  $\operatorname{Im}(z) \geq 0$  から,

$$\cos \frac{4k+1}{200}\pi \leq \frac{1}{2} \dots\dots\dots \textcircled{1}, \quad \sin \frac{4k+1}{200}\pi \geq 0 \dots\dots\dots \textcircled{2}$$

①より  $\frac{\pi}{3} \leq \frac{4k+1}{200}\pi \leq \frac{5}{3}\pi$ , ②より  $0 \leq \frac{4k+1}{200}\pi \leq \pi$  なので,  $\frac{\pi}{3} \leq \frac{4k+1}{200}\pi \leq \pi$

これより,  $\frac{200}{3} \leq 4k+1 \leq 200$  となり,  $\frac{197}{12} \leq k \leq \frac{199}{4}$  から  $16.4 < k < 49.8$

よって,  $k = 17, 18, \dots, 49$  から,  $z$  の個数は  $49 - 17 + 1 = 33$  である。

(3)  $z^n = i$  を満たす複素数  $z$  を,  $z = r(\cos \varphi + i \sin \varphi)$  ( $r > 0$ ,  $-\pi \leq \varphi < \pi$ ) とおくと,  $r^n = 1$  から  $r = 1$  となり,  $n\varphi = 2k\pi + \frac{\pi}{2}$  ( $-n\pi \leq n\varphi < n\pi$ ) であるので,

$$n\varphi = \frac{4k+1}{2}\pi, \quad \varphi = \frac{4k+1}{2n}\pi \quad \left(-\frac{n}{2} - \frac{1}{4} \leq k < \frac{n}{2} - \frac{1}{4}\right)$$

すると,  $z = \cos \frac{4k+1}{2n}\pi + i \sin \frac{4k+1}{2n}\pi$  となり,  $\operatorname{Re}(z) \geq \frac{1}{2}$  から  $\cos \frac{4k+1}{2n}\pi \geq \frac{1}{2}$

$$-\frac{\pi}{3} \leq \frac{4k+1}{2n}\pi \leq \frac{\pi}{3}, \quad -\frac{2}{3}n \leq 4k+1 \leq \frac{2}{3}n$$

これより  $-\frac{n}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{n}{6} - \frac{1}{4} \dots\dots\dots \textcircled{3}$  となり,  $n$  を 6 で割った余りで場合分けを行

い, ③を満たす整数  $k$  の個数  $N$  を求める。そこで,  $l$  を 0 以上の整数として,

(i)  $n = 6l + 1$  のとき

③より  $-\frac{6l+1}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+1}{6} - \frac{1}{4}$  となり,  $-l - \frac{5}{12} \leq k \leq l - \frac{1}{12}$  から,

$$-l \leq k \leq l-1, \quad N = (l-1) - (-l) + 1 = 2l$$

すると,  $3N - n = 3 \cdot 2l - (6l + 1) = -1 < 0$  となり,  $N < \frac{n}{3}$  である。

(ii)  $n = 6l + 2$  のとき

$$\textcircled{3} \text{より } -\frac{6l+2}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+2}{6} - \frac{1}{4} \text{ となり, } -l - \frac{7}{12} \leq k \leq l + \frac{1}{12} \text{ から,}$$

$$-l \leq k \leq l, \quad N = l - (-l) + 1 = 2l + 1$$

すると,  $3N - n = 3(2l + 1) - (6l + 2) = 1 > 0$  となり,  $N > \frac{n}{3}$  である。

(iii)  $n = 6l + 3$  のとき

$$\textcircled{3} \text{より } -\frac{6l+3}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+3}{6} - \frac{1}{4} \text{ となり, } -l - \frac{3}{4} \leq k \leq l + \frac{1}{4} \text{ から,}$$

$$-l \leq k \leq l, \quad N = l - (-l) + 1 = 2l + 1$$

すると,  $3N - n = 3(2l + 1) - (6l + 3) = 0$  となり,  $N = \frac{n}{3}$  である。

(iv)  $n = 6l + 4$  のとき

$$\textcircled{3} \text{より } -\frac{6l+4}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+4}{6} - \frac{1}{4} \text{ となり, } -l - \frac{11}{12} \leq k \leq l + \frac{5}{12} \text{ から,}$$

$$-l \leq k \leq l, \quad N = l - (-l) + 1 = 2l + 1$$

すると,  $3N - n = 3(2l + 1) - (6l + 4) = -1 < 0$  となり,  $N < \frac{n}{3}$  である。

(v)  $n = 6l + 5$  のとき

$$\textcircled{3} \text{より } -\frac{6l+5}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+5}{6} - \frac{1}{4} \text{ となり, } -l - \frac{13}{12} \leq k \leq l + \frac{7}{12} \text{ から,}$$

$$-l - 1 \leq k \leq l, \quad N = l - (-l - 1) + 1 = 2l + 2$$

すると,  $3N - n = 3(2l + 2) - (6l + 5) = 1 > 0$  となり,  $N > \frac{n}{3}$  である。

(vi)  $n = 6l + 6$  のとき

$$\textcircled{3} \text{より } -\frac{6l+6}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+6}{6} - \frac{1}{4} \text{ となり, } -l - \frac{5}{4} \leq k \leq l + \frac{3}{4} \text{ から,}$$

$$-l - 1 \leq k \leq l, \quad N = l - (-l - 1) + 1 = 2l + 2$$

すると,  $3N - n = 3(2l + 2) - (6l + 6) = 0$  となり,  $N = \frac{n}{3}$  である。

(i)~(vi)より,  $N > \frac{n}{3}$  となるのは,  $n = 6l + 2$  または  $n = 6l + 5$  のときである。

したがって, 求める  $n$  の条件は,  $n$  を 3 で割ったときの余りが 2 である。

### [解説]

複素数平面と  $n$  乗根についての問題です。(1)と(2)は基本的ですが,(3)は同様な内容であるものの,場合分けが必要なため,かなり時間を費やします。

5

解答解説のページへ

(1) 実数  $t$  に対し,  $h(x) = tx - f(x)$  とおく。ここで,  $f(x) = x^4$  のとき,

$$h(x) = tx - x^4, \quad h'(x) = t - 4x^3 = -4\left(x^3 - \frac{t}{4}\right)$$

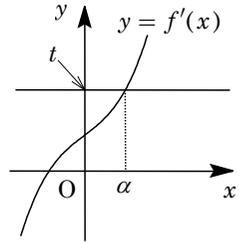
これより,  $h(x)$  の増減は右表のようになり,  $h(x)$  は  $x = \sqrt[3]{\frac{t}{4}}$  において最大となり, 最大値  $g(t)$  は,

$x$	...	$\sqrt[3]{\frac{t}{4}}$	...
$h'(x)$	+	0	-
$h(x)$	↗		↘

$$g(t) = h\left(\sqrt[3]{\frac{t}{4}}\right) = t\sqrt[3]{\frac{t}{4}} - \frac{t}{4}\sqrt[3]{\frac{t}{4}} = \frac{3t}{4}\sqrt[3]{\frac{t}{4}}$$

(2)  $h(x) = tx - f(x)$  に対して,  $h'(x) = t - f'(x)$

ここで,  $f'(x)$  は増加関数であり,  $\lim_{x \rightarrow -\infty} f'(x) = -\infty$  かつ  $\lim_{x \rightarrow \infty} f'(x) = \infty$  のとき, 任意の実数  $t$  に対し,  $h'(x) = 0$  すなわち  $f'(x) = t$  となる  $x$  がただ 1 つ存在する。



これを  $x = \alpha$  とおくと,  $h(x)$  の増減は右下表のようになる。

すると,  $h(x)$  は  $x = \alpha$  において最大となり, 最大値  $g(t) = h(\alpha)$  をもつ。

$x$	...	$\alpha$	...
$h'(x)$	+	0	-
$h(x)$	↗		↘

(3) (2)より,  $f'(\alpha) = t \cdots \cdots \textcircled{1}$  であり,

$$g(t) = h(\alpha) = at - f(\alpha) \cdots \cdots \textcircled{2}$$

さて, 実数  $s$  に対し,  $p(t) = st - g(t)$  とおくと,  $\textcircled{1}\textcircled{2}$  から,

$$p(t) = st - at + f(\alpha) = (s - \alpha)f'(\alpha) + f(\alpha)$$

ここで,  $q(\alpha) = (s - \alpha)f'(\alpha) + f(\alpha)$  とおくと,  $p(t) = q(\alpha)$  であり,  $t$  が実数全体を動くとき, (2) から  $\alpha$  も実数全体を動き,

$$p(t) - f(s) = q(\alpha) - f(s) = (s - \alpha)f'(\alpha) + f(\alpha) - f(s) \cdots \cdots \textcircled{3}$$

(i)  $\alpha < s$  のとき

$f(\alpha) - f(s) = f'(\beta)(\alpha - s)$  となる  $\beta$  が  $\alpha < \beta < s$  に存在し,  $\textcircled{3}$  から,

$$p(t) - f(s) = (s - \alpha)f'(\alpha) + f'(\beta)(\alpha - s) = (\alpha - s)\{f'(\beta) - f'(\alpha)\}$$

$$f'(\alpha) < f'(\beta) \text{ から } p(t) - f(s) < 0 \text{ となり, } p(t) < f(s)$$

(ii)  $\alpha = s$  のとき

$$\textcircled{3} \text{ から } p(t) - f(s) = 0 \text{ となり, } p(t) = f(s)$$

(iii)  $s < \alpha$  のとき

$f(\alpha) - f(s) = f'(\gamma)(\alpha - s)$  となる  $\gamma$  が  $s < \gamma < \alpha$  に存在し,  $\textcircled{3}$  から,

$$p(t) - f(s) = (s - \alpha)f'(\alpha) + f'(\gamma)(\alpha - s) = (\alpha - s)\{f'(\gamma) - f'(\alpha)\}$$

$$f'(\gamma) < f'(\alpha) \text{ から } p(t) - f(s) < 0 \text{ となり, } p(t) < f(s)$$

(i) ~ (iii) より,  $p(t) \leq f(s)$  であるので,  $p(t)$  の最大値は  $f(s)$  となる。

**[解説]**

微分と増減の問題です。(1)と(2)は基本的ですが、同様な方法で(3)も処理しようとする、第2次導関数が絡んできます。問題文の表現から、これは避けるべきだと感じられますので、平均値の定理の登場となったわけです。